

ラフカディオ・ハーンにおける日本語の音

——日本語の響きと出雲方言——

三 島 佳 音

はじめに

小泉八雲ことラフカディオ・ハーンは、左目が失明しており右目は強度の近視であった。そんなハーンにとって、異国である日本で執筆活動をする上で重要となってくるのは、彼の耳の感覚であった。ハーンは数多くの「音」に関する文献や作品を残しており、特に日本本来の音や虫の声などを深く愛した作家であった。そういった自然の音の描写のほかにも、ハーン作品には日本語がそのまま用いられている箇所が多く存在する。さらに言えば『Glimpses of Unfamiliar Japan¹』の「By the Japanese Sea」にある話のように「Ototsan! Washi wo shimai ni shitesashita toki mo, kon ya no yona tsuki yo data ne?—Izumo dialect」と、ハーンが節子と暮らしていた土地である松江の方言が用いられている場面もあり、ハーンが何らかの意図を持って英文の中に日本語を配置したことが分かる。

ハーンは節子や周囲の人々から聞いた話を物語として著しており、その点においても、ハーンにとって耳は作品を書くために何より大切な商売道具であったと思われる。ハーンにとって聴覚がいかに大事であったか、その研究は今までにいくつもなされてきた。たとえば西成彦は『神々の国の都』は、聴覚に始まり聴覚に終わる、これまた巧妙に計算された好一対をなす紀行文である²と述べ、ハーンは耳の人であったと指摘する。西と同じく、「ハーンにとって、聴覚世界は常に想像力の源泉であった」とハーンの聴覚について言及する河野龍也は次のように述べている。

(前略)ハーンの表現意識を追うと、「神々の国の首都」が持つ一つの奇妙な特質に気付く。この作品において、聴覚世界と視覚世界とは執拗なまでに分断されているのである。第一章に登場する音は、すべて視界を遮蔽した部屋の中で聞く音である。それは第二章冒頭の、「このように町の人たちの生活が始まる早朝の物音に起こされて、私は小さな障子を開けて朝の様子を眺め渡す」という一節から明らかになる。だが、障子を開けて最初に聞こえる第三章の拍手の音には、わざわざ「手を打つ人の姿は灌木の植え込みにさえぎられて見えない」という一文が付加され、鶯の鳴き声“Ho——ke-kyo!”(ホーケキョー)が五度響く第四章の中にも、美声の主はついに姿を現わさない。「大きな檜の箱に針金を張った窓の外に更に紙障子を閉め渡したのが彼の住みかで、その暗い中に身を潜めている」からだ。いずれの例をみても、音はその発信者の姿から丹念に切り離され、独立した雰囲気をかもし出すように設定されているのである。

ちなみに聴覚描写の精緻さに比べ、視覚描写が意図的に醜化されるのも本作の特徴であった。象徴的な“Ghostly”(かすかな／霊的な)の語によって、松江の景色は棚引く霞に包まれ、夕暮れ時の宍道湖は印象派絵画のように色彩表現が折り重なる。風景の輪郭は抽象的に、地理的な特性は曖昧に。視聴覚世界が分裂した様相を呈するのは、ハーンの創作に特徴的なものであるらしい。³

また、内藤高もハーンの聴覚に注目し、『怪談の音』に対して言及している。

幽霊としての音という問題にこだわるとすれば、より直接的にそれが問題になるのは『怪談』であろう。『怪談』の中でも音や声に対するさまざまなハーンの注意を感じ取ることができる。そしてそれは単に外界の音を聴くというだけではなく、「音を書く」、創作の問題とも密接に結びついてくる。例えば、下駄の音は、ハーンが現実においてしばしば耳にした音であるとともに、『怪談』の典型的な音でもあり、現実と創作の媒介者の典型的な例として興味深いものがある。⁴

来日したハーンは、左右違う音で鳴る下駄の音に魅了される。さらに内藤はハーンの履物へのこだわりを次のように続ける。

こうした下駄の音がテキストの中で鮮明に鳴り響くことになるのが、『怪談』の中の「宿世の恋」、有名な「牡丹灯籠」の再話であろう。『怪談』のもととなった妻小泉節子の語りを聞きながら、ハーンがその声や音の表現にこだわったことは、節子の証言からよく知られている。下駄の音もちろんである。

「アラッ、血が」は「幽霊滝の伝説」の台詞となり、履物へのこだわりはそのまま「宿世の恋」の成立を想像させる。後者でハーンが下駄の音を響かせていることはあらためていうまでもない。原典『夜窗鬼談』の「牡丹燈」には、「履声ノ来ルヲ聞ク」と書いてあるが、音そのものを示すオノマトペ的な表現はない。ハーンはそこに音を入れる。⁵

ハーンが耳を使う作家であることは上記した通り様々な先行研究がなされてきたが、それは虫や下駄の音といった日本の自然や伝統文化の音、もしくは『Kottō』の「The legend of Yurei-Daki」の中にある「Aràlit is blood!」といった日本語の響きの研究が主流であり、節子の出雲方言には今まであまり注目されてこなかった。しかしハーン作品は出雲方言訛りの節子の語りを聴いて書かれたものが多く、ハーン作品を読み解く上で節子の発音や出雲方言が重要であることは言うまでもない。日本語が母語ではないハーンには、日本人とは違うように音としての日本語が聞こえていたはずである。今回の研究では特に節子自身の言葉や、節子の出雲方言の影響がどれほどハーン作品に現れているかを中心に考察しつつ、ハーンが出雲方言、ひいては日本語をどのように日本語を受け取っていたのかということを考えていく。この論文ではその手掛かりとして、

ハーンが英文作品にそのまま取り入れた日本語を調査し、その真意を読み解いていくこととする。

第一章 ハーンが原拠となる作品と同様の単語を用いる意図

第一節 ハーンが複数の作品に用いた日本語

ハーンの作品の中には、日本語がそのまま用いられていることがある。例えば、「samurai」は『Kottō』『Kwaidan⁷』の中の作品だけでも『Kottō』の「In a cup of tea」、『Kwaidan』の「The Story of Mimi-Nashi-Hōichi」「Diplomacy」「Rokuro-Kubi」「The story of Aoyagi」「Jiu-Roku-Zakura」の6作品に用いられており、「daimyō」は『Kwaidan』中の作品だけでも「The Story of Mimi-Nashi-Hōichi」「Rokuro-Kubi」「The story of Aoyagi」「The dream of Akinosuké」の4作品に用いられている。なお、『Kottō』『Kwaidan』に出てきた日本語についてはここで全て言及せず、巻末に資料として載せておいた。

ハーンが「samurai」「daimyō」といった単語を多く用いたのは何故だろうか。それにはハーンがクレオール言語を大切にしていたことが関連していると思われる。

第二節 ハーンにとってのクレオール言語

ハーンにとってのクレオール言語の話に入る前に、まず前提としてクレオールの定義をここに記す。以下は桜井隆の解説である。

言語接触から生じたピジン pidgin が発達して、それを母語とする話者をもつに至ったものの。言語のタイプの名称であって、一言語の名ではない。代表例はハイチのフランス語系クレオール Haitian Creole など。言語自体としてはピジンとはっきりとした差異はないが、生活のあらゆる面で使用されるため語彙が増え、複雑なことを表現できるようになっている。ベースになった言語からみれば、ブローケンだという感じがあり、低く評価されてきたが、近年正書法を確立し、詩や小説などを生み出しているものもある。使用されている地域のほとんどが発展途上国に属するため、目立たないが、けっしてまれな存在ではない。

8

ハーンがクレオールをどのように受け止めてきたかについては、平川祐弘の先行研究を中心に見ていく。

(前略)主としてアフリカ渡米の人々の発音体系にフランス語文法体系が単純化され接木されて各地で生れたクレオール語は、フランス本国の人々から見ればいずれも腐ったフランス語 *corrupt French* であり、そのような言葉も、それに伴って生じた文化の雑種化——こ

れを狭義のクリオゼーション、クレオール化という——も、長い間本土や内地の人々の注意を特に引かず、記録もされなかった。それを最初に記録した一人がラフカディオ・ハーンである。⁹

ハーンは、英国占領軍の軍医であったチャールズ・ブッシュ・ハーンとギリシャ人のローザ・カシマティとの間に生まれた子であった。父チャールズの実家があるアイルランドに渡るがチャールズが転属のため不在であり、ローザとハーンは英語になじめず異国の生活に苦しんだ。その後ハーンはローザと生き別れ、チャールズに見捨てられ、裕福な大叔母に育てられるもその生活は辛い思いをして送っていた。そして1866年に左目を失明し、入学した学校も大叔母の破産により退校を余儀なくされる。

そのような背景で育ったためかハーンは社会的弱者への同情の強い人であった。そのマイノリティーへの共感的理解の能力、マージナルなものへの関心がハーンを世にも珍しいルポタージュ記者に仕立てたのである。アメリカへ一八六九年に移民して本人はどん底から這い上がって社会的上昇を夢み、一応成功してルポタージュ記者となったが、白人だけでなく黒人にも関心を寄せた。それは当時としては非常に稀なことで、ハーンは南北戦争後、オハイオ川流域の黒人の生活を最初に記録した作家ともいわれる。¹⁰

ハーンが弱いものに対して愛おしさを感じるのには、ハーン自身が「合いの子」であることを意識してきたからであった。ハーンは来日した際に混血の少女を見つけ、次のように感じる。

合いの子で、貧しくて、美しいおまえ！こんな外国の港で！おまえはこのお墓の中にいる人たちと一緒にの方が仕合せではないのか。そこへ行けば心優しいお地藏様がおまえの面倒をみてくださる。おまえを大きな袂の中にかくまってくくださる。——「死んだ方がまし」とハーンは思わず口走った。自分もかつて混血児としてダブリンで捨てられという切実な思いが、その合いの子を見た時によみがえったことが察せられる。そして自分という子供に辛く当たった西洋社会との対比においてハーンはお地藏様信仰に象徴される子供を大切にす日本社会への好意的関心を深めていくのである。

混血児こそ主流文化という大潮流に巻き込まれた小文明の宿命である混清現家の落し子、いい換えるとクレオール化の落し子、その象徴である。そして世間はまだ誰も指摘しないが、そのハーンが西洋人として来日し土地の女節子と交わりつつ作り上げた「ヘルンさん言葉」こそが日本語系クレオール語だったのである。ハーンはもともと混血児として生まれ、気がついてみたら日本でも混交語を話し、自分自身が混血児の父となっていた。だが父チャールズの真似はしたくないかと思ったハーンは、妻子のために、自分が英国国籍を捨て日本の市民権を取った。そしてそのために日本在留の西洋人から「ハーンは土人になった」Hearn went native と陰口を言われるのである。そしてそのネガティブな評価はハ

一の文学作品そのものに対しても下される傾向にもあるのである。そしてそのような口調の中にこそクレオール化への中心文化人の軽蔑が見てとれるのである。¹¹

ここで平川は「ヘルンさん言葉」を日本語系クレオール語と表現する。支配・被支配を考慮せず、広い意味で異国の言語が混じりあうという意味で捉えるならば、確かに平川の言うように「ヘルンさん言葉」は広義的なクレオール語になるであろう。

このようにハーンは自身が混血であることに悩んだ過去があったからこそ、弱い立場にあるクレオールを理解した人であった。そしてクレオールを肯定したハーンだったからこそ、ハーンは翻訳する際に日本語を用いたと考えられるが、その話に入る前に同時代日本の翻訳状況はどのようなものであったのかを見ていくこととする。

第三節 同時代日本の翻訳文化状況

ここからは、ハーンが生きた時代の日本翻訳文化はどのようなものであったのかを考えていく。以下は『国民文學と言語』の引用である。

日本文学の言文一致は 1889 年頃、山田美妙と二葉亭四迷によって始まる。文学は西鶴張りの擬古文で綴られていたものであったが、「です」「である」体で書かれるようになる日本文学の近代化が二葉亭らによって進められた。¹²

日本文学の近代化がどの程度進んだかを示すために、竹内は二葉亭四迷訳ツルゲーネフ『あひびき』を例に出している。二葉亭の『あひびき』は 1888 年¹³と 1896 年¹⁴のものとは文体が大きく変わっており、1888 年では「さて其の下に栖を構へ、四辺の風景を眺めながら、唯遊獵者のみが覚えのあるといふ、例の穩かな、罪のない夢を結んだ」であった箇所も 1896 年の『あひびき』では「其の下の巢を作って、四方の景色を眺めながら、遊獵者でなければ興味を知らぬといふ、例の穩かな静かな夢を結んだ」に変更されている。

こうした二葉亭らの働きによって言文一致が着実に根付いて行ったが、どうして二葉亭は言文一致を目指したのであろうか。1906 年 5 月、二葉亭は『文章世界』に「余が言文一致の由来」を書いている。以下はその引用である。

もう何年ばかりになるか知らん、餘程前のことだ。何か一つ書いてみたいとは思つたが、元来文章下手で皆目方角が分らぬ。そこで、坪内先生の許は行つて、何うしたらよからうかと話して見ると、君は圓朝の落語を知つてみやう、あの圓朝の落語通りに書いてみたら何うかといふ。

で、仰せの儘にやつて見た。所が自分は東京者であるからいふ迄もなく東京辯だ。即ち東京辯の作物が一つ出来た譯だ。早速、先生の許へ持つていくと、篤と目を通して居られ

たが、忽ち碯と膝を打つて、これでいゝ、この儘でいゝ、生じつか直したりなんぞせぬ方がいゝ、とかう仰有る。

自分は少し気味が悪かつたが、いゝと云ふのを怒る譯にも行かず、と云ふものゝ、内心少しは嬉しくもあつたさ。それは兎に角、圓朝ばりであるから、無論言文一致體にはなつてゐるが、茲にまた問題がある。それは「私が……でゐます」調にしたものか、それとも、「俺はいやだ」調で行つたものかと云ふことだ。坪内先生は敬語のない方がいゝと云ふお説である。自分も不服の點もないではなかつたが、直して貰はうとまで思つてゐる先生の仰有ることであり、先づ兎も角もと、敬語なしでやつて見た。これが自分の言文一致を書き初めた抑である。¹⁵

二葉亭が言文一致を書ききっかけとなつたのは坪内逍遙の一言であつた。日本文学に悪影響を及ぼしている「勸懲主義打破」を目標に写実的な小説の創作を叫んだ坪内逍遙、そしてその著書『小説神髓¹⁶』に刺激され二葉亭は『浮雲¹⁷』『あひびき』を執筆するのである。

次の文は二葉亭四迷が1906年1月『成功』に書いた「余が翻訳の標準」の引用である。

文学に対する尊敬の念が強かつたので、例えばツルゲーネフが其の作をする時の心持は、非常に神聖なものであるから、これを翻訳するにも同様に神聖でなければならぬ、就ては、一字一句と雖、大切にせなければならぬとやうに信じたのである。

併し乍ら、元來文章の形は自ら其の人の詩想に依つて異なるので、ツルゲーネフにはツルゲーネフの文體があり、トルストイにはトルストイの文體がある。其の他凡そ一家をなせる者には各獨特の文體がある。この事は日本でも支那でも同じことで、文體は其の人の詩想と密着の關係を有し、文調は各自に異つてゐる。従つてこれを翻譯するに方つても、或る一種の文體を以て何人にも当て嵌める譯には行かぬ。ツルゲーネフはツルゲーネフ、ゴルキーはゴルキーと、各別にその詩想を會得して、厳しく云へば、行住座臥、心身を原作者の儘にして、忠實に其の詩想を移す位でなければならぬ。是れ実に翻譯における根本的必要条件である。¹⁸

また、この同年同月である1906年1月に二葉亭は『中央公論』に「余の愛讀書」を書いている。

僕は文章ではガンチャロツフ（Goncharoff）が好きであつた。ガンチャロツフの文章の好きな點は基文調にあつた。ガンチャロツフの文調は少しくモノトナスの弊があるから、あれが僕の理想であつた譯ではないが、然し彼は或點に於て文調で成效して居るから自分も一つ日本語で文調を出したいと思つて、文章を書く時は文調が恐ろしく気になつた。其當事の考では勿論日本語にも文調といふ奴は著しく明かではない。ないことはないがドウモハツキリせぬ。非常に上品で殊によると西洋の方が野卑かも知れぬが、ハツキリあらは

れぬから聲を出して朗讀すると日本の文章はダラ／＼／＼して居るやうに聞こえ、どうも變化が乏しく抑揚頓挫が缺けて居るやうに思はれる。¹⁹

さらに、前田愛は二葉亭の文体に対し「外国語学校におけるグレイと二葉亭の出会い」が関係してと述べ、「グレイがその肉体をかりてじかに再現したロシア文学の人間像が、二葉亭の文学に及ぼした影響の深さについてはあらためて説くまでもあるまい」、「二葉亭が円朝の癖から学びとった「身振りとしての言語」は、たぶんこのグレイの朗読を絶えず想起することによって、『浮雲』の文体のなかに生かされた」ことに言及している²⁰。このように、二葉亭が外国文学で言文一致を目指すようになったのは、逍遙の『小説神髓』に刺激されたからであり、その文調の元となったのはゴンチャロフなどの西洋文化に基づいた文調であった。逍遙の『小説神髓』と西洋文化の文体、この二つが二葉亭に『浮雲』や『あひびき』を書かせるきっかけとなったのである。

以上がハーンの生きた時代における日本の翻訳の歴史であるが、それではハーンはどのように翻訳について考えていたのであろうか。言文一致の流れを生み出した坪内逍遙とハーンには親交があったことが分かってはいるが、逍遙はハーンとの仲を「つい昨今といふさへもいかがと思ふほど、ほんの浅い知合である」と言っており、ハーンが逍遙をきっかけで、もしくは逍遙とは関係のないところから、この日本の翻訳状況を理解していたかどうかは分からない。しかし、日本の翻訳状況を変えるきっかけでもあった「ふさわしい文章」を目指すことに関して、ハーンは日本で言文一致の動きが起こる前に言及している。1880年1月30日、ハーンは「アイテム」紙に「Translating and Mutilating²¹」という題でゾラの翻訳への考えを残している。以下は高木大幹の訳である。

ゾラの小説を何が何でも逐語訳せよ、と言うつもりはない。ゾラの小説は、芸術的には非常に価値が高いが、それにもかかわらず有害な文学の最たるものであると思う。ゾラの小説は原作のままでおくのがよい。だが、もし翻訳されたら、その翻訳を芸術的な観点から批評するほかはない。そして、そういう形で批評しながらも、この作品を推賞するわけにはいかない。謙虚な翻訳者が、猥褻な部分を抜かしたというのなら許せましょう。あるいは、淫らな箇所を積極的に訳すというのなら、それはそれでよい。だが、翻訳者が外国作家の不埒な考えの代わりに、自分自身の間拔けた凡説を持ち出したり、おもしろくもない意見を述べ立てたりする権利はないのだ。(中略) 翻訳者が単純にゾラに従った場合はよい。だが、清められたゾラはもはやゾラではない。猥褻でないとしたら、ゾラは無に等しい。ゾラの作品は隅から隅まで道徳上のカリエスに犯されていて、それがページというページを蝕んでいる。少しでもそれを除けば、作品全体の性格が変わってしまうのだ。そういう訳し方をすれば、原作の調子や精神は失せてしまう。それはちょうど、骨がぼろぼろにくずれた骸骨を眺めても、かつてその骨が支えていた暖かい血の通う美しい肉体が少しも思い浮かばないのと同じことだ。それにしても、一体何でまたこういう不完全かつ有害

な書物を翻訳するのだろうか？原作の持つ価値が芸術的な価値だけであり、それをフランス語より男性的な言語に翻訳してしまえば、その芸術的な価値さえも失われてしまうのだ。こういう男性的な言語を用いると、少しも淫らでないことを言ってさえ、下品で卑しい感じになりやすい。こういう言語を外国の悪徳と調和させることは不可能である。²²

このハーンの論説から見えるのは、翻訳者というフィルターを通して外国語文学を翻訳することへの熱い思いである。ハーンは日本で言文一致を目指す動きが起こるよりも前から、翻訳とは原作の調子ごと言葉に置き換えることであると考えていたのである。ハーンにとって翻訳することは、ただそのまま意味が伝わりさえすればよいということではなく、原作の性格を失わないように言葉を当てはめることであった。このハーンの論説から考えると、ハーンが日本語をそのまま作中に用いたのは原拠となった作品や言い伝えが持つ日本らしさを消したくなかったからではないか、と考えられる。勿論、ハーンが『Gleanings in Buddha-Fields²³』の中で「A Living God」を書いたことで外国に伝わった「Tsunami」や、上に記した「samurai」「daimyō」という単語は日本文化特有のものであるため、他の英単語に当てはめることができなかったという理由も考えることができる。しかし、冒頭に「Ototsan! Washi wo shimai ni shitesashita toki mo, kon ya no yona tsuki yo data ne?—Izumo dialect」と書いた通り、必ずしも日本語を使わなければならないとは思えない場面でハーンは日本語をそのまま用いており、そこにはやはり確固としたハーンの日本文化の性格を失わせないためのこだわりがあったのではないだろうかと考えられる。

それでは何故、ハーンは日本文化を残すことにこだわったのであろうか。そこにはハーンがクレオールを理解する作家であったからだと考察する。この時代の日本はハーンが節子に「日本に、こんな美しい心あります、なぜ、西洋の真似をしますか」と言ったように日本文化が西洋化に向かう時代であった。平川祐弘は「クレオール化 creolization」ということがいまや世界的な意味において話題となるのは、広義のクレオール化がグローバル化 globalization と対になる現象だからである」と述べる。日本が西洋化、グローバル化へと進んでいた時代であったからこそ、ハーンはクレオールである日本語を用いて世界に日本語の響きを発信したのではないかと考える。

第二章 ハーンが原拠となる作品と異なる単語を用いる意図

第一節 擬音や台詞などの長文

この章からはハーンが原拠には存在しない単語を作品の中に配置したその理由を考えていくこととする。原拠の中には存在しないハーンの表現としては、擬音がある。例えば、ハーンは「The legend of Yurei-Daki」の中で「picha picha」という擬音を用いている。これはハーンが日本語の音を面白いと考えたためであると思われる。以下は内藤高の『明治の音』からの引用である。

モースなど他の多くの日本来訪者と同様、ハーンも来日以来この音に強い関心を持って耳を傾けている。滞在初期の記録「東洋の土を踏んだ日」の中に、早くも下駄の音に対する注意が窺える。しかも、それは単にその響きの大きさや騒々しさを記述したのではない。

「……日本の下駄は、それをはいて歩くと、いずれもみな右左わずかに違った音がする——片方がクリンといえ、もう一方がクランと鳴る。だからその足音は、微妙に異なる二拍子のこだまとなって響く」。教えられることなくこれを聴き取ったのであれば、鋭い耳であろう。左右異なる響きがつくる音楽性にハーンは早くも魅了される。²⁴

また、擬音を用いた理由には、ハーンが節子の用いた擬音の響きを面白いと感じたということも一因する。その根拠は小泉節子著『思い出の記²⁵』である。以下はその引用である。

私が昔話をヘルンに致します時には、いつも始めにその話の筋を大体申します。面白いとなると、その筋を書いて置きます。それから委しく話せと申します。それから幾度となく話させます。私が本を見ながら話しますと『本を見る、いけません。ただあなたの話、あなたの言葉、あなたの考でなければ、いけません』と申します故、自分の物にしてしまっていないければなりませんから、夢にまで見るようになって参りました。

話が面白いとなると、いつも非常に真面目にあらたまるのでございます。顔の色が変りまして眼が鋭く恐ろしくなります。その様子の変り方が中々ひどいのです。たとえばあの『骨董』の初めにある幽霊滝のお勝さんの話の時なども、私はいつものように話して参りますうちに顔の色が青くなって眼をすえて居るのでございます。いつもこんなですけれども、私はこの時にふと恐ろしくなりました。私の話がすみますと、始めてほっと息をつきまして、大変面白いと申します。『アラッ、血が』あれを何度も何度もくりかえさせました。どんな風をして云ってたでしょう。その声はどんなでしょう。履物の音は何とあなたに響きますか。その夜はどんなでしたらう。私はこう思います、あなたはどうです、などと本に全くない事まで、色々相談致します。二人の様子を外から見ましたら、全く発狂者のようでしたらうと思われます。

また、台詞などの長文は「The Story of Mimi-Nashi-Hōichi」では「Kaimon!」、「Yuki-Onna」では「Ki ga aréba, mé mo kuchi hodo ni mono wo iu」などが日本語の台詞が用いられている。

日本語を用いた理由は前章に記した理由と同じで、英訳しても作品に内包される日本の雰囲気を残すためであると考えられる。以下は『思い出の記』からの引用である。

『怪談』の初めにある芳一の話は大層ヘルンの気に入った話でございます。中々苦心致しまして、もとは短い物であったのをあんなに致しました。『門を開け』と武士が呼ぶところでも『門を開け』では強味が無いと云うので、色々考えて『開門』と致しました。²⁶

このように、ハーンは台詞の中に意図的に日本語を残している。これには 2 つの意図があったと考えられる。1 つは節子の記述のように日本語の響きを面白いと思ったハーンが、その響きを残すために、もう 1 つは不可思議な物語の中に、不可思議な言語の台詞を組み込むことで、より一層幻想的な物語の雰囲気を作り出すという意図である。テキストに残された日本語の音に関しては、内藤高が言及している。

音と同時にテキストの中の声ということにもここで注意する必要がある。一つの特徴として指摘できることは、ハーンはそれぞれの作品の中に、日本語をしばしばそのまま残していることである。例えば、「耳なし芳一」の中では、訪ねてきた侍の幽霊の呼びかけに対して、「はい」という芳一の返事がそのまま「kaimon!」となっている。直後に、門をはずす音が聞こえたとあるので日本語を解さない読者（出版はまず英語圏の読者を対象としている）にも意味の想像はつくだろうが、とにかくテキストを声を出して読むとすれば、まず日本語の音が意味不明のまま響くはずである。何か不安が生じる。こうした書き方は、とりわけ怪奇なもの、不可思議なものを語るとき独自の効果を持つことになろう。（中略）一般の英語の読者は当惑するだろう。こうした箇所では、ハーンは日本語の響きをそこに留めたかったのだろうし、それと同時に、読者に対しては、それが東の間意味不明瞭に音の〈幻影〉を提示することになることも意識していただろう。²⁷

ハーン自身が気に入った日本語の響きを残し、語る物語をより怪奇なものにするためにハーンは日本語をそのまま置いたと思われるが、それでは日本語の中でも出雲方言を記した理由は何だったのであろうか。ハーンの出雲方言を言及するには、節子が出雲方言について考えていく必要があるため、次節からは節子の影響について考察していく。

第二節 節子からの影響による原拠となる作品との相違

第一項 節子の発音による影響

まず、定義として節子が関わったと考えられる作品をここに明記しておく。染村絢子などによると²⁸、節子がハーンの仕事にアシスタントとして参加するようになったのは 1899 年に執筆された『In Ghostly Japan²⁹』からである。したがって、節子が出雲弁の影響を受けたのは 1899 年から 1907 年の作品となり（『In Ghostly Japan』『The goblin spider³⁰』『Shadowings³¹』『A Japanese Miscellany³²』『Kottō』『The old woman who lost her dumpling³³』『Kwaidan』『Japan: An Attempt at Interpretation³⁴』）、出雲方言の研究はこれらの作品が中心となる。

例えば、節子が出雲方言からの、もしくは発音の影響であろうと考えられるのは「The legend of Yurei-Daki」より「Uji Jūi-Monogatari-Shō」（宇治拾遺物語抄）、「Oshidori」より「Hi kurureba

Sasoeshi mono wo- Akanuma no Makomo no kure no Hitori-ne zo uki! (日暮るれば さそいしものを 赤沼の まこもがくれの ひとり寝ぞ憂き) などである。

上記の他にも節子の発音の影響で原拠となる作品と異なった表記がされている単語は複数存在する。以下は平山輝夫の『島根のことば』の引用である。なお、いわゆるズーズー弁と呼ばれる出雲・隠岐の方言と鳥取県西部(伯耆)の西伯郡・日野郡を合わせて雲伯方言という。

雲伯方言を特徴づけるのは、音声面の、①ズーズー弁であり、中舌母音の [i] である。さらに、②イ母音に近づいたエ母音[e]、③母音の無声化、④合拗音 [kwa] [gwa]、⑤ハ行子音の [Φ]、⑥ラ行子音が語中語尾で隠在し、「クー(来る)」「トーニクー(取りに来る)」「コーオ(これを)」などとなる現象、⑦開合の区別が存在し、「バーズィ(坊主)」「ニョーバ(女房)」と発音されることなどである。これらはいずれも石見では聞かれない。文法面では、①「～シャル、～サツシャル」という敬語が見られ、②「借りる」(中国地方ではカル)は共通語と同じ形である。③「ハラッタ(払った)」「クッタ(食った)」などと促音便になることや、「行く」が音便形にならずに「エキタ(行った)」になるのも特徴である。³⁵

これを踏まえれば、ハーンが「さそいしものを」と書くべき部分を「さそえしものを」と記した理由に説明がつく。出雲弁は「イ」母音を発音する時に「エ」母音に近い発音で発声するため、今回の場合で言うとハーンが節子の「さそいしものを」を「さそえしものを」と聞いたのではないかと考えられる。節子の出雲訛りは 100 年近く前のものであり、印刷上の誤植と考えられるものも勿論存在するが、それを考慮しても「相当なものであった」と藤原治は述べている。また、藤原は次のようにも述べている。

ヘルン直弟子の方たちによって訳された松江・出雲ことばを、現在のそれと、ついおもっていたが、もうずいぶん変わっているのだという実感。考えれば当然のことであったが、残念ながら大いに驚いた。百年はやはりたいへんな時の隔たりであった。そしてこの百年はそれ以前の百年どころか、二百年、三百年とも違うだろう。³⁶

それでは、当時の出雲弁はどのようなものであったのだろうか。次節から調べていくことにする。

第二項 100 年前の出雲弁についての文献

後藤藏四郎の『出雲方言考³⁷』には、「言語学上の見解から出雲方言を取り扱つたものは明治 39 年 8 月高橋龍雄氏「いづもなまり」と題して松陽新報に連載したものが始であらう」³⁸とあったが、松陽新報が所蔵されている国立国会図書館、島根県立図書館、出雲市立図書館には現在松陽新報の該当の記事は残っていない。しかし、高橋龍雄の「出雲方言考」と題された論説が『國

學院雑誌』に記載されていたのでそれと上記の後藤藏四郎の『出雲方言考』を参考にする。高橋の「出雲方言考」は「出雲方言考」「出雲方言考(續)」「出雲方言考(完)」と続いており、それぞれ1906年6月、1906年12月、1907年7月のものである。高橋が「いづもなまり」を執筆したのが明治39年、西暦1906年のことであるから時期的に見ても、この「出雲方言考」と「いづもなまり」はほぼ似た内容のものであると考えられ、また「出雲方言考」は「いづもなまり」よりも早く世に出た言語学上、出雲方言を取り扱った文献ということになる。

後藤藏四郎の『出雲方言考』によると、出雲の方言は

(一) 口の開き方が少いこと

(二) 舌の運動が足らぬこと

口の開き方の少いことや舌の運動の足らぬことから母音に明瞭を缺き、イ列音とエ列音との區別、及びウ列音とオ列音との區別が出来難く、又イ列音とに混雜を生ずることがある

という特徴を持っていることが分かる。

また高橋の「出雲方言考」には出雲訛音の50音表が記載されている。以下はその引用である。

出雲五十音 (方言及卑言用)

ア イ オ エ オ
カ キ ク ケ コ
ガ ギ グ ゲ ゴ
サ シ シ シェ ソ
ザ ジ ジ ジェ ゾ
タ チ チ テ ト
ダ ジ ジ デ ド
ハ フ フ フェ ホ
バ ビ ブ ベ ボ
パ ピ プ ペ ポ
マ ミ メ メ モ
ヤ イ イ エ ヨ
ラ リ リ レ ロ
ワ イ オ エ オ

(前略)五十音圖の伊列は大多分訛つてゐる。又字列も過半訛つてゐる。而して佐行の「セ、ゼ」が「シェ、ジェ」となり、波行の「ヒ、ヘ」が「フィ、フェ」となり、也行のユ音が出来ないため、シュ、ジュ、キュ、ギユはすべてシ、ジ、キ、ギとしか発音されない。即ちユ音を含む拗音は、全然訛つてゐる。而して奈行良行は全體が曖昧である。³⁹

また、ハーンが生きた時代に執筆された出雲方言の文献もある。それが福田英太郎の『出雲言葉のかきよせ』である。『出雲言葉のかきよせ』には例として当時の親子の間答が載っている。以下はその引用である。

「親 今日 学校へ えんだかや」

今日は学校へ行きしか

(かや[○]は疑問の語尾にしてまた単にえともいひまたか[○]とえ[○]を連発してか[○]え[○]と用ゐることあり例へわ「それわなんだえ | それは虚言ではないか[○]え」の如し)

「子 えんま もッどった」

いま かへりました

(えん[○]まといふは今の訛りならん)

「親 先生が 小言 つきーや せなかつたかや」

先生に しかられは せねか

(言[○]ふといふことをつく[○]といふ故に小言[○]をい[○]ふとの意を小言をつくといふなり)

「子 えんやだつた」

イヤ しかられは しません

(だ[○]つたはで[○]あ[○]つたの訛なりけん[○]なはけ[○]と[○]な[○]を連続して更に訛りしなるべし)

「親 わは 飯くつたかや」

おまへは 飯を食ひしか

「子 えんや まんだだ」

イヤ まだ 食ひません

「親 飯が しんだら ちかひに いんでごせや」

飯が 澄まば 使に往いて おくれ

(すむのす[○]をし[○]に訛ること訛音の部と見て知るべし)

後藤と高橋の「出雲方言考」、そして『出雲言葉のかきよせ』からわかるのは、当時の出雲弁もやはり「イ」と「エ」はかなり近い発音であったこと、さらに言えば現在の出雲弁よりも母音の区別がなく似た発音がされていたであろうことである。このことを踏まえると、ハーンが出雲訛りの節子の発音を聞いて「させいしものを」と書くべきものを「さそえしものを」と原拠とは異なった発音で単語を記していたことにも説明がつく。

ここでもう一度思い出してほしいのは、ハーンがクレオール言語に理解があった人物であったことである。「同時代日本の翻訳文化状況」で述べたように日本語は英語に対するクレオール言語であった。そして同時に、出雲方言は日本語に対するクレオール言語であったのである。ハーンが日本語、特に出雲方言を用いたことはハーン自身がクレオールの理解者であったこと、そして東京弁という標準語が広がり始めた時代であったことに関係していたのではないだろうか。ハーン

は日本語や出雲方言の響きが面白いというだけでなく、日本語と出雲方言がクレオール言語であるからこそ、クレオール言語としての日本語、そして出雲方言に魅力を感じていたのではないかなと思われる。

第三節 節子の読み間違いの影響

また、節子の発音以外にも節子の読み間違いだと考えられるものも、ハーンの作品にはいくつが存在する。それは「Oshidori」より「Sonjo」（馬允 - マノブヨ）、「The Story of O-tei」より「Chosei」（杏生 - キョウセイ）などである。上に記した通り、節子は「本を見る、いけません。ただあなたの話、あなたの言葉、あなたの考でなければ、いけません」と八雲に言われていたため、八雲に話す際に間違えた可能性はあったと考えられる。以下は「馬允」が何故「ソンジョー」と節子が読んだかの考察である。上からそれぞれ八雲会編集『小泉八雲草稿・未刊行拾遺集第1巻草稿』の染村絢子の記述、平川祐弘の『骨董・怪談』の解説を引用した。

「魚虫禽獣」の最初の話は、「馬」に関するものである。第1丁オには、振仮名付きの草書体で「龍馬」、第1丁ウには、同じく「尊苗」が出てくる。以下に続く話にも「尊名」（第2丁オ、振仮名はない）、「尊像」（第2丁ウ）等が出てくる。ここに書かれた「馬」と「尊」の草書体を比べると、ラフな言い方を許して頂けるなら、「馬」の字体の上に「ソ」を付したのが「尊」の字体であり、混同するとは考えられない。ところが「おしどり」で2か所に出てくるうち、話の冒頭にある「馬ノ允」（第29丁ウ）の「馬」の字体は、上部が「ソ」に近くなっている。したがって「魚虫禽獣」の初めの話の「尊苗」あるいは「尊像」等の意識が働いて「そんじょう」となり、しかも送り仮名の「ノ」も読まなかったものと考えられる。第17丁オには「馬允」と振仮名付きで出てくるが、これは、楷書体であり、考証のためには、残念ながら参考とはならない。馬の草書体は、外のところでもみられる。しかし、「おしどり」の馬の草書体は、もともと尊の草書体と錯覚しやすい字体にみえる。⁴¹

原拠には「馬ノ允」とあるが、節子が「馬」の崩し字を「尊」と読み間違え、さらに小さくて墨も薄い「ノ」を見逃したために Sonjo となったのであろう。⁴²

「馬」と「尊」の草書体は形が酷似しており、染村や平川が言うように「馬允其陸奥國赤沼の鴛鴦を射て出家のこと」に出てくる「馬」の字は墨が薄くなっており、節子が「馬」を「尊」と読み間違えても不思議ではない。

また、「杏生」の「杏」には本来「チョー」という読み方はないが、「銀杏」の読みの時には「イチョウ」という読み方が存在する。節子は「銀杏」としての「杏」の読み方しか知らなかったか、その「杏」の読み方の印象が強かったために「杏生」を「チョウセイ」と読んだのであろうと考えられる。

このように節子は物語を語る上ではあまりにも間違いを多く作る人であった。しかし、このような節子がハーンに物語を聞かせることは、やはりハーンにとって大切なことであったのである。無学を恥じる節子にハーンが述べたことを、萩原朔太郎が『思ひ出の記』を参考に「小泉八雲の家庭生活」という題で記している。以下は『萩原朔太郎全集第十一巻⁴⁸』からの引用である。

ある時ヘルンから萬葉集の歌を質問され、答へることができなかつたので、泣いてその無学を詫び、良人に不實の罪の許しを乞うた。その時ヘルンは、黙つて彼女を書架の前に導き、彼の尤大な著作全集を見せて言つた。この澤山の自分の本は、一體どうして書けたと思ふか。皆妻のお前のお蔭で、お前の話を聞いて書いたのである。『あなた學問ある時、私この本書けません。あなた學問ない時、私書きました』と言つた。實際もし彼の妻がインテリ女性であつたとすれば、日本の古い傳説や怪談を、女の素直な心で率直に実感することはできなかつたらう。『無學で貞淑な女は天才以上である』とニイチエが言つてゐるが、ヘルンの妻の如き女性は、正にその意味での『天才以上』であつたのである。

ハーンにとって節子の主観的で素直な語りは、物語を書く上で重要なものであつたことが萩原朔太郎の記述から見て取れる。この節子の語りをハーンが大切にしたのは、節子の語りが面白かつたというのもあるだろう。しかし、「同時代日本の翻訳文化状況」で書いたようにハーンは日本文化を愛し、その日本文化を英文によって失わせてしまうことのない作品を作ることを心掛けていた人間であつた。節子の語りとは、ハーンにとって日本文化そのものであつたに違いない。節子の語りは無学で素直であつた。だからこそ、彼女は學問で塗り固められたために生ずる思想や主張が入り込まず、作品の良さをそのまま映しこんだ自然な語りができただろうか。そしてハーンはその語りを生かして書くことを大切にしていたのではないかと考えられる。

おわりに

日本文化に基づいた単語をそのまま作中に配置したり、擬音や出雲弁による台詞を意図的に用いているところを見る限り、ハーンは日本語を英文に潜ませることにこだわりを持っていたように感じられる。八雲の作品に複数回登場する日本語の単語は固有名詞や日本語の形でしか表せない言葉、すなわち英語に翻訳した際にぴったり当てはまらない言葉が多い。出雲方言の言葉や日本語をそのまま作品に用いるあたり、八雲は英語に翻訳した作品に日本らしさを残すために節子や周囲の人々が使う出雲方言や、日本の文化を含んでいる日本語特有の言葉を用いたのではないだろうか。そしてハーン作品に置かれた日本語は怪談を紡ぐ上で強力な武器となる。日本語を知らない読者にとって、ただでさえ不可思議なものを語る文章に、突然今までの言語とは違った言語が現れることは、その物語の怪奇さをより強く感じさせる。そうして読者はより一層、物語が持つ不可思議な雰囲気や飲み込まれていく。ハーンが日本語をそのまま用いることは日本文化の性格を表現し、そして同時に怪談の不可思議さを表現するために必要なことであつたのである。

特に擬音や出雲弁による台詞に関しては、節子が『思ひ出の記』にて話していたように、節子の発した言葉の響きを面白がっていたことが分かる。その節子の語りは、学問によって塗り固められていないからこそ素直な語りとなっており、それはやはり八雲が愛した自然な日本文化を内包するものであったと考えられる。八雲は西洋に近づいていく日本を嫌い、伝統や自然を愛する日本文化を愛する人間であった。節子の語りはハーンが愛した日本そのものの体現であったのである。この当時の日本語、そして出雲方言は西洋化に浸食され始めていたクレオール言語であった。小さく弱いものに同情し、クレオールの良き理解者であったハーンは、クレオール言語としての日本語と出雲方言を愛したように思われる。だからこそ日本語や出雲方言を作品の中に用い、日本語の面白い響きや出雲方言を扱う節子の語りを好んだのではないだろうか。

ハーンにとって母国語でない日本語は、不可思議で面白い響きを内包する音であった。下駄の音や虫の声、そういった言葉を時には作品に登場させてみたり声に出して真似たりして、自然や文化を豊かに表現する日本語の音をハーンは愛した。ハーンが日本語を作中に用いたのは何より日本の自然や文化を愛していたからであり、そしてハーンに日本語を用いさせたのはその面白い響きと節子の語りの存在であった。これまで、節子の出雲方言に対する研究はあまりされてこなかった。しかし、ハーンの作品に節子が多大な影響を与えたことは明らかであり、ハーンの作品に現れる節子の日本語や出雲方言は見逃せない要素である。ハーンにとっての日本語の音とはどのようなものであったのか。それは、節子の語りやハーンのクレオールの視点、それぞれのフィルターによって介された日本の自然と文化そのものであったと考えられる。

¹ Hearn, Lafcadio(1894) *Glimpses of Unfamiliar Japan*, Boston, Houghton, Mifflin

² 西成彦『ラフカディオ・ハーンの耳』(岩波同時代ライブラリー、1998. 4)

³ 河野龍也「ハーンの視聴覚描写と日本理解——紀行・怪談から『日本——一つの解明』まで——」、平川祐弘『ハーンの文学世界』(新曜社、2009. 11)

⁴ 内藤高『明治の音』(中央公論新社、2005. 3)

⁵ 注4に同じ

⁶ Hearn, Lafcadio(1902) *Kotto: being Japanese curios, with sundry cobwebs*, New York, Macmillan

⁷ Hearn, Lafcadio(1905) *Kwaidan: stories and studies of strange things*, Boston, Houghton, Mifflin

⁸ 『日本大百科全書』(小学館、1986. 1)

⁹ 平川祐弘「ハーンにおけるクレオールの意味——ルイジアナ、マルティニーク、日本」、平川祐弘『ハーンの文学世界』(新曜社、2009. 11)

¹⁰ 注9に同じ

¹¹ 注9に同じ

¹² 竹内好編『国民文学と言語』(河出書店、1954. 10)

¹³ 1888年版は『国民之友』に連載されたもの

¹⁴ 1896年版は二葉亭四迷訳ツルゲーネフ『片恋』(春陽堂、1896. 11)に所収されたもの

¹⁵ 二葉亭四迷『二葉亭四迷全集第四巻』(筑摩書房、1985. 7)

¹⁶ 坪内逍遙『小説神髓』(松月堂、1885. 4)

¹⁷ 二葉亭四迷『新編浮雲』(金港堂、1887. 4)

¹⁸ 注15に同じ

¹⁹ 注15に同じ

²⁰ 前田愛『近代読者の成立』(有精堂、1973. 11)

²¹ Hearn, Lafcadio(1880) *Translating and Mutilating*, The Daily City Item

²² 『ラフカディオ・ハーン著作集 第三巻』(恒文社、1981. 8)

²³ Hearn, Lafcadio(1897) *Gleanings in Buddha-Fields*, Boston, New York: Houghton Mifflin

-
- ²⁴ 注 4 に同じ
- ²⁵ 『小泉八雲全集 別冊』(第一書房、1927.12)
- ²⁶ 注 24 に同じ
- ²⁷ 注 4 に同じ
- ²⁸ 八雲会編集『小泉八雲草稿・未刊行拾遺集第 1 巻草稿』(株式会社雄松堂出版、1990.8)
- ²⁹ Hearn,Lafcadio(1899) In Ghostly Japan, Boston:Little, Brown, and Company
- ³⁰ Hearn,Lafcadio(1899)The goblin spider,Y.Nishinomiya,Publisher and Art-printer,Successor to T.Hasegawa, 17 Kami Negishi, Tokyo, Japan
- ³¹ Hearn,Lafcadio(1900)Shadowings, Boston:Little, Brown
- ³² Hearn,Lafcadio(1901)a Japanese miscellany, Boston:Little, Brown
- ³³ Hearn,Lafcadio(1902)The old woman who lost her dumpling,Tokyo,Hasegawa Takejirou
- ³⁴ Hearn,Lafcadio(1907)Japan : an attempt at interpretation,Tokyo,Yushodo
- ³⁵ 平山輝夫編『島根のことは』(明治書院、2008.4)
- ³⁶ 藤原治「セツ夫人と松江言葉」、八雲会編『へるん今昔』(恒文社、1993.3)
- ³⁷ 後藤藏四郎『出雲方言考』(松江郷語改善会、1927.10)
- ³⁸ 1927 年発行とあるが、後藤本人が記したはしがきに「大正 12 年」と書いてあるので、実際に記されたのは 1923 年以前である
- ³⁹ 高橋龍雄「出雲方言考(完)」、『國學院雑誌』(国学院大学総合企画部、1907.7)
- ⁴⁰ 福田英太郎『出雲言葉のかきよせ』(嶋根懸私立教育會、1888.1)
- ⁴¹ 八雲会編集『小泉八雲草稿・未刊行拾遺集第 1 巻草稿』(株式会社雄松堂出版、1990.8)
- ⁴² 平川祐弘『骨董・怪談』(河出書房新社、2014.6)
- ⁴³ 萩原朔太郎『萩原朔太郎全集第十一巻』(筑摩書房、1977.8)

巻末資料 『Kottō』『Kwaidan』の作品中で八雲が英文にそのまま取り入れた日本語群

調査した作品は『Kottō』より「The legend of Yurei-Daki」「In a cup of tea」「Common Sense」「Ikiryō」「Shiryō」「The story of o-kame」「Story of a fly」「Story of a pheasant」「The story of Chūgorō」、『Kwaidan』より「The Story of Mimi-Nashi-Hōichi」「Oshidori」「The Story of O-tei」「Ubazakura」「Diplomacy」「Of a Mirror and a Bell」「Jikininki」「Mujina」「Rokuro-Kubi」「A dead Secret」「Yuki-Onna」「The story of Aoyagi」「Jiu-Roku-Zakura」「The dream of Akinosuké」「Riki-Baka」「Hi-mawari」「Hōrai」である。固有名詞もカウントした。

作品	言葉	種類	訳注	補足
Kottō				骨董
The legend of Yurei-Daki	Yureidaki		This and the eight following tales have been selected from the Shin-Chmon-Shū, Hyaku Monogatari, Uji Jūi-Monogatari-Shō, and other old Japanese books, to illustrate some strange beliefs. They are onle curious.	幽霊滝
	Kurosaka	地名		黒坂
	Hōki	地名		伯耆
	Taki-Daimyōjin			滝大明神
	Saisen-bako			賽銭箱
	Shin-Chomon-Shū			新著聞集
	Hyaku Monogatari			百物語
	Uji Jūi-Monogatari-Shō			宇治拾遺物語(抄)
	Yasumoto O-Katsu	人名		安本お勝
	Obaa-San			おばあさん
	Pichā-pichā	擬音		ぴちゃぴちゃ
	Oi		The exclamation “Oi!” is used to call the attention of a person-it is the Japanese equivalent for such English exclamations as “Halloa!” or “Ho, there!” etc.	
	(O-katsu)san	敬称		さん
	Asa-toriba			麻とり場
	Arā			あら
In a cup of tea	Tenwa	年号		元和

	Nakagawa Sado			中川佐渡
	Hakusan	地名		白山
	Hongō	地名		本郷
	Yedo	地名		江戸
	Wakatō		The armed attendant of a samurai was thus called.The relation of the wakatō to the samurai was that of squire to knight.	若党
	Samurai			侍
	Sekinai			関内
	Shikibu Heinai			式部平内
	Tantō		The shorter of the two swords carried by samurai.The longer sword was called katana.	短刀
	Matsuoka Bungō	人名		松岡文吾
	Tsuchibashi Bungō	人名		土橋久藏 (節子の間 違いか)
	Okamura Heiroku	人名		奥村平六
Common Sense	Atagoyama	地名		愛宕山
	Kyōtō	地名		京都
	Bosatsu		Samntabhadra Bodhisattva.	菩薩
	Fugen Bosatsu			普賢菩薩
Ikiryō	Ikiryō		Literally:"living spirit";that is to say,the ghost of a person still alive.An ikiryō may detach itself form the body under the influence of anger,and proceed to haunt and torment the individual by whom the anger was caused.	生霊
	Reiganjima	地名		霊岸島
	Setomonodana			瀬戸物棚
	Kihei	人名		喜兵衛
	Rokubei	人名		六兵衛
	Ōsaka	地名		大阪
	(Kihei)sama	敬称		様

Shiryō	Shiryō		The term “shiryō”, “dead ghost”—that is to say, the ghost of a dead person—is used in contradistinction to the term “ikiryō”, signifying the apparition of a living person. “Yūrei” is a more generic name for ghosts of any sort.	死霊
	Nomoto Yajiyémon	人名		野本弥治右衛門
	Daikwan		A daikwan was district governor under the direct control of the Shōgunate. His functions were both civil and judicial.	代官
	Echizen	地名		越前
	Saishō		The Saishō was a high official of the Shōgunate, with duties corresponding to those of a prime minister.	宰相
	Metsuké		The Metsué was a Government official charged with the duty of keeping watch over the conduct of local governors or district judges, and of inspecting their accounts.	目附
The story of o-kame	O-kamé			おかめ
	Gonyémon	人名		権衛門
	Nagoshi	地名		名越
	Tosa	地名		土佐
	Hachiyémon	人名		八右衛門
	Aa! Uréshiya!	台詞		ああ！うれしや！
	Bonji			梵字
	Ségaki			施餓鬼
Story of a fly	Kyōto	地名		京都
	Kazariya Kyūbei	人名		飾屋久兵衛
	Teramachidōri	地名		寺町通り
	Shimabara	地名		島原
	Tama	人名		たま
	Wakasa	地名		若狭

	Jōrakuji			常楽寺
	Mommé			匆
	Genroku	年号		元禄
	Gaki			餓鬼道
	Beni			紅
	Jiku Shōnin			自空上人
	Myōten			妙典
	Sotoba			卒塔婆
Story of a pheasant	Tōyama	地名		遠山
	Bishū	地名		尾州
	Jitō		The lord of the district, who acted both as governor and magistrate.	地頭
The story of Chūgorō	Chūgorō	人名		忠五郎
	Koishikawa	地名		小石川
	Hatamoto			旗本
	Suzuki	人名		鈴木
	Yashiki			屋敷
	Yedogawa	地名		江戸川
	Naka-no-hashī	地名		中の橋
	Ashigaru		The ashigaru were the lowest class of retainers in military service.	足輕
	Urashima			浦島
Kwaidan				怪談 (節子の発音)
The Story of Mimi-Nashi-Hōichi	Mimi-nashi-Hoichi			耳なし芳一
	Dan-no-ura	地名		壇ノ浦
	Shimonoseki	地名		下関
	Heike	人名		平家
	Taira	人名		平
	Genzi	人名		源氏
	Minamoto	人名		源
	Antoku Tenno	人名		安徳天皇
	Oni-bi			鬼火

	Amidaji			阿弥陀寺
	Akamagaseki	地名		赤間関
	Hoichi	人名		芳一
	Biwa			琵琶
	Biwa-hoshi			琵琶法師
	Kijin			鬼神
	Samurai			侍
	Hai!	台詞		はい！
	Daimyō			大名
	Kaimon!	台詞		開門！
	Rojo			老女
	Nii-no-Ama			二位の尼
	(Hoichi-)San	敬称		さん
	Hannya-Shin-Kyo			般若心経
Oshidori	Oshidori			おしどり
	Sonjo	人名		馬允
	Tamura-no-Go	地名		田村郷
	Mutsu	地名		陸奥
	Hi kurureba Saso ^o shi mono wo- Akanuma no Makomo no kure ^{no} Hitori-ne zo uki!	和歌	At the coming of twilight I invited him to return with me!Now to sleep alone in the shadow of the rushes of Akanuma-ah!what misery unspeakable!	日暮るれば さそ ^o しも のを 赤沼の まこものく れ ^が ひとり寝ぞ 憂き
The Story of O-tei	O-tei	人名		お貞
	Niigata	地名		新潟
	Echizen	地名		越前
	Nagao Chōsei	人名		長尾香生
	Nagao-Sama	敬称		長尾様
	zokumyō		The Buddhist term “zokumyō(“profane name”)signifies the personal name,borne during life,in contradistinction to the	俗名

			“kaimyō”(“sila-name”)or “homyō”(“Low name”)given after death –religious posthumous appellations inscribed upon the tomb,and upon the mortuary tablet in the parish-temple.For some account of these,see my paper entitled,“The Litreature of the Dead,”in Exotics and Retraspectives,vol.IX,of this edition.	
	kaimyō			戒名
	homyō			法名
	butsudan			仏壇
	Ikao	地名		伊香保
	Echigo	地名		越後
Ubazakura	ubazakura			乳母桜
	Asamimura	地名		朝美村
	Onsengōri	地名		温泉郡
	Iyō	地名		伊予
	Tokubei	人名		徳兵衛
	muraosa			村長
	Fudō Myō Ō			不動明王
	Saihōji			西法寺
	Tsuyu	人名		露
	O-sodé	人名		お袖
	Fudō-Sama	敬称		不動様
Diplomacy	Yashiki			屋敷
	Tobi-ishi			飛び石
	samurai			侍
	Ségaki			施餓鬼
Of a Mirror and a Bell	Mugenyama	地名		無間山
	Tōtōmi	地名		遠江
	Jōdo			浄土
	Hakata	地名		博多
	Kyūshū	地名		九州
	Amida			阿弥陀

	Shō-Chiku-Bai			松竹梅
	Mugen-Kané			無間鐘
	Nazoraëru			なぞらえる
	Umégaë	人名		梅ヶ枝
	Kajiwara Kagésué	人名		梶原影季
	Heiké			平家
	ryō			両
	Umégaë no chōzubachi tataitē O-kané ga déru naraba Mina San mi-uké wo Sōré tanomimasu		"If, by striking upon the wash-basin of Umégaë, I could make honorable money come to me, then would I negotiate for the freedom of all my girl-comrades."	梅ヶ枝の 手水鉢たた いてお金が 出るならば 皆さん見受 けをそーれ たのみます
	Ōigawa			大井川
Jikininki	Jikininki		Literally,a man-eating goblin.The Japanese narrator gives also the Sanscrit term,"Rākshasa";but this word is quite as vague as"jikininki,"since there are many kinds of Rākshasas.Apparently the word"jikininki"signifies here one of the Baramon-Rasetsu-Gaki—forming the twenty-sixth class of pretas enumerated in the old Buddhist books.	食人鬼
	Musō Kokushi	人名		夢窓国師
	Zen			禪
	Mino			美濃
	Anjitsu			庵室
	tōmyō			灯明
	Segaki		A Segaki-service is a special Buddhist service performed on behalf of beings supposed to have entered into the condition of gaki(pretas),or hungry spirits.For a brief account of such a service,see my Japanese Miscellany,vol.	施餓鬼

			X of this edition.	
	Go-rin-ishi		Literally, "five-circle[or 'five-zone']stone." A funeral monument consisting of five parts superimposed—each of a different form—symbolizing the five mystic elements: Ether, Air, Fire, Water, Earth.	五輪石
	Matsudaira			松平
	Matsue	地名		松江
Mujina	Mujina			貉
	Akasaka	地名		赤坂道
	Tokyō	地名		東京
	Kii-no-kuni-zaka	地名		紀伊国坂
	Kii	地名		紀伊
	Jinrikisha			人力車
	Kyōbashi	地名		京橋
	O-jochū	台詞	O-jochū ("honorable damsel"),—a polite form of address used in speaking to a young lady whom one does not know.	台詞
	Soba		Soba is a preparation of buckwheat, somewhat resembling vermicelli.	そば
	Aa!—aa!!—aa!!	台詞		ああ！！あ あ！！あ ああ！！
	Koré!Koré!	台詞		これ！こ れ！
	Hé!	台詞		へっ！
Rokuro-Kubi	Rokuro-Kubi			ろくろ首
	Samurai			侍
	Isogai Hédazaemon Takétsura	人名		磯貝平太左 衛門武行
	Kikuji	人名		菊池
	Kyūshū	地名		九州
	Eikyō	年号	The period of Eikyō lasted from 1429 to 1441.	永享

	daimyō			大名
	Kwairyō			怪龍
	koromo		The upper robe of a Buddhist priest is thus called.	衣
	Kai	地名		甲斐
	Un-sui-no-ryokaku			雲水の旅客
	Kunshi ayayuki ni chikayorazu	諺	The superior man does not needlessly expose himself to peril.	君子危 <small>う</small> きに近寄らず
	ro		A sort of little fire place, contrived in the floor of a room, is thus described. The ro is usually a square shallow cavity, lined with metal and half-filled with ashes, in which charcoal is lighted.	炉
	Aruji			主
	Sōshinki			搜神記
	Miyagé		A present made to friends or to the household on returning from a jorney is this called. Ordinarily, of course, the miyagé consists of something produced in the locality to which the journey has been made: this is the point of Kwairyō's jest.	土産
	Suwa	地名		諏訪
	Nan-hō-i-butsu-shi			南方異物誌
	ryō			兩
A dead Secret	Tamaba	地名		丹羽
	Inamura Gensuké	人名		稲村源助
	O-sono	人名		お園
	Kyōto	地名		京都
	Nagaraya	人名		長良屋
	Tansu			箏箏
	Zen			禪
	Daigen Oshō	人名		大元和尚
	Né-no-Koku		The Hour of the Rat (Né-no-Koku), according to the old	子の刻

			Japanese method of reckoning time, was the first hour. It corresponded to the time between our midnight and two o'clock in the morning; for the ancient Japanese hours were each equal to modern hours.	
	kaimyō		Kaimyō, the posthumous Buddhist name, or religious name, given to the dead. Strictly speaking, the meaning of the word is silā-name. (See my paper entitled "The Literature of the Dead" in Exotics and Retrospectives, vol. IX of this edition)	戒名
Yuki-Onna	Yuki-Onna			雪女
	Musashi	地名		武蔵
	Mosaku	人名		茂作
	Minokichi	人名		巳之吉
	Yuki-akari			雪明り
	O-Yuki	人名	This name, signifying "Snow," is not uncommon. On the subject of Japanese female names, see my paper in the volume entitled Shadowings, vol. X of this edition.	お雪
	Yedo	地名		江戸
	Ki ga aréba, mé mo kuchi hodo ni mono wo iu	諺	When the wish is there, the eyes can say as much as the mouth.	気が有れば 目も口ほど に物を言う
The story of Aoyagi	Aoyagi		The name signifies "Green Willow";—though rarely met with, it is still in use.	青柳
	Bummei			文明
	Samurai			侍
	Tomotada	人名		友忠
	Hatakéyama Yoshimuné	人名		畠山善統
	Noto	地名		能登

	Echizen	地名		越前
	Daimyo			大名
	Hosokawa Masamoto	人名		細川政元
	Kyōto	地名		京都
	Tadzunétsuru, Hana ka toté koso, Hi wo kurasé, Akénu ni otoru Akané sasuran?		The poem may be read in two ways; several of the phrases having a double meaning. But the art of its construction would need considerable space to explain, and could scarcely interest the Western reader. The meaning which Tomotada desired to convey might be thus expressed:—"While journeying to visit my mother, I met with a being lovely as a flower; and for the sake of that lovely person, I am passing the day here.... Fair one, wherefore that dawn-like blush before the hour of dawn?—can it mean that you love me?"	訪ねつる、 花かとしてこそ、 日を暮らせ、 明けぬにおとる、 あかねさすらん
	Izuru hi no Honoméku iro wo Waga sodé ni Tsutsumaba asu mo Kimiya tomaran.		Another reading is possible; but this one gives the signification of the answer intended.	出づる日の ほのめく色 を 我が袖に 包まば明日も 君やとまらん
	ryō			両
	Kōshi ō-son gojin wo ou: Ryokuju namida wo tarété rakin wo hītatari: Komon hitotabi irité fukaki koto umi no gotoshi: Koré yori shorō koré rojin			公子王孫後 塵を逐う 緑珠涙を垂 れて羅巾を 滴る 候門一度入 りて 深きこと海 の如し

				これより籬 郎これ路人
Jiu-Roku-Zakura	Jiu-Roku-Zakura			十六桜
	Uso no yona,— Jiu-roku-zakura Saki ni kerī!			嘘のよな— — 十六桜 咲きにけ り！
	Wakégōri	地名		和気郡
	Iyo	地名		伊予
	Samurai			侍
	Migawari ni tatsu			身代わりに 立つ
	Hara -kiri			腹切り
The dream of Akinosuké	Toichi	地名		十市
	Yamato	地名		大和
	Miyata Akinosuké	人名		宮田安芸之 助
	gōshi			郷土
	Yeomen			ヨーマン
	Daimyō			大名
	gosho-guruma			御所車
	kérai			家来
	Kokuō			国王
	Tokoyo		This name "Tokoyo" is indefinite. According to circumstances it may signify any unknown country,—or that undiscovered country from whose bourn no traveler returns,—or that Fairyland of far-eastern fable, the Realm of Hōrai. The term "Kokuō" means the ruler of a country,—therefore a king. The original phrase, Tokoyo no Kokuō, might be rendered here as "the Ruler of Hōrai,"	常世

			or "the King of Fairyland."	
	Hōrai			蓬莱
	rōmon			楼門
	Kamuri			冠
	Daiza		This was the name given to the estrade, or dais, upon which a feudal prince or ruler sat in state. The term literally signifies "great seat."	台座
	Raishū	地名		莱州
	Hanryōkō	地名		蕃陵江
	Shisha			使者
Riki-Baka	Riki-Baka			力ばか
	Riki	人名		力
	Baka			ばか
	Kana			仮名
	Nanigashi-Sama			何某様
	Kōjimachi	地名		麹町
	Ushigomé	地名		牛込
	Zendōji			善導寺
	furoshiki		A square piece of cotton-goods, or other woven material, used as a wrapper in which to carry small packages.	風呂敷
	yen			円
Hi-mawari	Hi-mawari			ひまわり
	Takata	地名		高田
Hōrai	Hōrai			蓬莱
	Kakemono			掛け物
	Shinkirō			蜃気楼
	So-rin-shi			相隣子
	Riku-gō-aoi			六合葵
	Ban-kon-tō			万根湯
	Yō-shin-shi			養神子
	Shin	王朝		秦

資料編

竹久夢二の文集に眼を止めた。手にとつてはらばらとめくつてゐると、一遍の詩が目に入つた。(略)	竹久夢二「ひとりの夢のふるさと」新潮社、大正8年、8月		
ひとりの身をなんとせう		「私」およびヒロイソンの台詞として登場 岸田麗子のエッセイに「浅田鮎」が登場する	先に及びヒロイソンの台詞
浅田鮎	岸田麗子『父岸田彌生』言華社、昭和37年7月		
『江戸風俗往来』	菊池貴一郎著、鈴木栄三編『絵本江戸風俗往来』平凡社、昭和40年		
「咳をしてもひとり」	尾崎放哉「咳をしてもひとり」『置業』大正5年2月		先輩の台詞

資料編

	集』講談社、昭和47年			
コナン・ドイル『失われた世界』	Arthur Ignatius Conan Doyle <i>The Lost World</i> 1912	山田風太郎『明治ペンスの怪』	山田風太郎『明治ペンスの怪』『人殺新潮』昭和56年3月	
谷崎潤一郎『春宴』	谷崎潤一郎『春宴』	内田百閒『山高帽子』	内田百閒『山高帽子』『中央公論』昭和4年6月	
岩波文庫『古今和歌集』	佐伯権友校注『古今和歌集』(岩波文庫) 岩波書店、平成9年2月	フレードリヒ・ニーチエ著 桑木義典訳『ソクラテスタラカク語り』『ニーチエ氏論理一現』清成会、一九〇二年	黒岩洋彦著『藤道王』『芳潮』(明治34年3月～35年6月連載)	
御都合主宰若く語り				
第三巻				
き				
編題王				
どっこい生きている	昭和26年公開の日本映画『どっこい生きてる』	『仮面ゾイターズ』(昭和49, 50)の主人公、ストロンガーの決め台詞。『天の呼ぶ、地が呼ぶ』	ヒロイン演じるゾリンセス・カルクの台詞	
可愛きものよ、汝の名は速くなり	ウリアム・ソウェイクス博士著、坪内逍遙訳『ハムレット』(明治42年2月)	『仮面ゾイターズ』(昭和49, 50)の主人公、ストロンガーの決め台詞。『天の呼ぶ、地が呼ぶ』		
よも速く(2)				
天の呼ぶ、地が呼ぶ、人が呼ぶ、天を叫ぶ、知りたくば胸かたててやろ、我が名はゾリンセス・カルク。				

	黒いゾンチキョウ			
	四半世紀の孤独	G・カルクニアニクス著、藤道訳『百年の孤独』新潮社、昭和47年5月	尾崎豊作詞、作曲『15の魂』(昭和58)の歌詞「盗んだバイクで走りだす 行き先も解らぬまま」	
	盗んだバイクで走りだしたあの日のように、行きたく先も分からぬまま、走って行けると思っているのか!			
	巨大な地図を前にして腕を組み、事件を解決しようとしてバイクをくゆらせろシャーロック・ホームズの如き輝かしい顔をしています。	Arthur Ignatius Conan Doyle <i>Sherlock Holmes</i> 1887-1927		
	カルクスの仮面	契村ササエ『カルクスの仮面』『花とゆめ』白泉社、昭和50年～		
	風雲編田坂			
	風雲編風邪	小杉天外『風雲編』『読売新聞』(明治36年2月～9月連載)	昭和61年5月から平成元年4月にかけてTBSで放送された『シャーロック・ホームズ』の番組『探偵たけし版』	
第四章 風邪	ゾンベンクロ	岸田禎子『冬岸田禎子』雪華社、昭和37年7月	岸田禎子のエッセイに『ゾンベンクロ』	岸田禎子の名前が第二章「探偵版た
第四章 風邪	ゾンベンクロ			

資料編

ローカレット・ミツチエ 『風と共に去りぬ』	Margaret Mitchell <i>Gone with the Wind</i> 1936		かできた色々な本を思い浮かべました。最近のものではオズカー・ワイルドの『トリスタン・ゾレ』の肖像。そびひらローカレット・ミツチエの『風と共に去りぬ』あるいは谷崎潤一郎の『細雪』、丹地文子のなまみこ物類五郎『日本繪道』
谷崎潤一郎『細雪』	公論社 昭和18年〜		
丹地文子『なまみこ物類五郎』	中央公論社、昭和40年		
山本徳五郎『小説 日本繪道』	道記社 講談社、昭和18年		
山本徳五郎『小説 日本繪道』	道記社 新潮社（新潮文庫）、昭和33年		
萩原望都		昭和44年『たかいし』8月号に『ルビとミニ』でデビューする。以後、少女誌を中心に数多く作品を発表する。昭和46年から『ポーの一族』シリーズで、人気作家としての地位を確立。少女漫画界を代表する作家の一人である。『日本漫画家名鑑500』	
大島弓子		昭和43年に『週刊ローカレット』巻の増刊号に『ポーの一族』を発表し、デビュー。以後、『週刊ローカレット』、『月刊セブンティーン』などを中心に、数多くの短編ミステリア作品を発表する。(彩) 昭和53年、『Lal』	

川原泉			4] 5月号に『脚の国屋』を発表。挿入画を主とするこのシリーズは、人生の感慨で表現し、漫画界に大きな衝撃を与えた。昭和54年、この作品で第三回講談社漫画賞を受賞。昭和59年に、この作品はアニメ化された。(『日本漫画家名鑑500』1992年12月)
ロアルド・ダール『ワチルダは小さな天才』	Roald Dahl <i>Matilda</i> 1988		
カズトナー『エーミールと探偵たち』	Erich Kästner <i>Emil und die Detektive</i> 1928		
『飛ぶ教室』	Erich Kästner <i>Das</i>		

資料編

章	本文/用	書籍情報	備考①	備考②
第二章	夜は短くあつよ乙女		吉井勇「海風、中山晋平作曲『フンドラの唄(大4)』の歌詞「命短し 恋まよ乙女」	
	偽電気がフロン	太宰治「人間楽格『狂望』昭和23年	「人間楽格」の中に「電気がフロンが登場している	電気がフロン→(前)々年に東京にはじめて電燈が点燈され、電気を文明としてその名を冠したといわれる)明治13年に売り出されたフロンランプ風につくられた雑酒の商品名。(『日本国語大辞典』小学館、1975年)
	李白さん		李白→中国唐時代の詩人、詩聖杜甫に対して、詩仙と称される。また、大酒家であったことから、大酒呑みの称として用いられる。『日本国語大辞典』小学館、1975年)	
	酒と相と男と男		河島英五作詞・作曲、宮本光邦編曲「酒と相と男と女」(昭51)	

第二章	深瀬海魚たち	私は一匹一匹の鱈や鱈をみえるように思われまして	内田百閒「鱈」『鱈の侵入式』岩波書店、昭和9年4月	内田百閒の「鱈」の中の一文と類似している。「鱈の光が一枚一枚見分けられるようにはつきりしてあつた。」	ヒロインが古本市で長靴に出会った本。昔好きだった。
	ジェラルド・ダレル『鳥と獣と種類たち』	『鳥と獣のものど家族たち』	General Durrell, <i>BIRDS, BEASTS, AND BELONGINGS</i> 1969 General Durrell, <i>MY FAMILY AND OTHER ANIMALS</i> 1956		
	『ジュエステイニス』	『ジュエステイニス』	Lawrence Durrell, <i>Justina</i> , 1957	『フレイクサン・ドリリア 回遊楽』の第一作目	
	『シタダール』	『シタダール』	Lawrence Durrell, <i>Balthazar</i> , 1968	『フレイクサン・ドリリア 回遊楽』の第二作目	
	ロレンス・ダレルという人の『フレイクサン・ドリリア 回遊楽』	丸山眞勇『日本政治思想史研究』東京大学出版会、昭和27年	Lawrence Durrell, <i>The Alexander Quartet</i> , 1961		
	日本政治思想史研究	丸山眞勇『日本政治思想史研究』東京大学出版会、昭和27年			
	フレイク・ダレルとかく語りき	フレイク・ダレルとかく語りき	著、桑木謙蔵訳「フレイク・ダレルとかく語りき」『ニユーエッセイ論語集一編』音成会、一九〇二年	第三章の章題の元ネタ	
	論理哲学論考	論理哲学論考	Ludwig Josef Johann Wittgenstein, <i>Logisch-Philosophische Abhandlung</i> , 1921		
	オスカー・ワイルド『トリファン・ダレイの肖像』	オスカー・ワイルド『トリファン・ダレイの肖像』	Oscar Fingal O'Flahertie Wills Wilde, <i>The Picture of Dorian Gray</i> , 1890		ヒロインの通称に「私はこれまで誰